

諦を悟る

※諦＝真理・まこと

第四回 独自の技を創る(1)

森俊博(もり・としひろ)
プロフィール

昭和25年、宮城県亶理町出身。昭和48年東北学院大学(経済学部)卒業。第4回全空連全日本空手道選手権大会優勝(昭和50年)。第21回JKA全国大会(昭和53年)、第23回大会優勝(昭和55年)。第3回IAKF世界空手道選手権優勝(昭和55年)。師範、総本部理事、国際理事、政策委員。

私は、山本周五郎の小説が好きで、その作品の中に「よじょう」という短編小説があります。作者49歳(昭和27年4月)の作品で、後に、「後半期の道をひらいてくれた」と自負した小説です。

作品の全体の流れをフランスの作曲家・ラベルのバレエ曲「ダフニスとクロエ」で表現し、同じ小節を繰り返しながら、大きな主題を表現するという「リズム」を「小説」で試そうと思いい立ち、12、13年後に「よじょう」で作り上げた……とのことでした。

木村久邇典氏は、「自分独特の文体や文章を創出することもまことに困難なことだが、一応できあがった型を破棄して新しい文体を作り出すのは、もつとも容易ならざる技ではないだろうか。周五郎は取えてこの困難に挑み、みごとに成功を取めたのである」と述べています。

さて、私も組手において、山本周五郎と同じく、今までの組手のやり方を変え、ラベルの「ダフニスとクロエ」のリズムと同じような表現をした技を創りあげました。

元来、私は攻撃タイプで、足払いと同時に突きで極める技を得意としていましたが、攻撃だけでは強い相手に勝てないことに気がつきました。

そこで、飯田紀彦氏の「詰め」で相手に技を出させ、確実に受けて極める組手のやり方を学び、それを徹底的に「まね」しました。

そして、大坂可治氏にお願いをして、左右の突きや前蹴り・横蹴り・回し蹴り、後ろ蹴り等の様々な技を出してもらい、それを受けて極める(出合いも含む)稽古も徹底的に行いました。

また気迫を持って詰めるために、迫力ある突き・蹴りを磨くべく、基本の稽古時に、最初から最後まで持てる力とスピードを出し切り、限界に挑戦する稽古を毎日続けました。その結果、向かい合うと相手は後退してしまいました。

このツイー・ツイーと「詰める」リズムが「ダフニスとクロエ」のリズムであり、山本周五郎の「よじょう」のリズムと同じ「空手の技のリズム」だったのです。

間合いを気で詰めて、精神的に圧迫し、相手の動きを殺し、なおかつ相手の前足を自分の前足で払って崩した瞬間、同時に相手の上段に裏拳打ちと中段逆突きを相手に極めて勝負独自の技を身に付けたのです。

この技を使った場合、相手は技を出すことができないため、自分が相手に当てられず、

怪我もしません。

また、諸葛孔明のように山間に誘い込み、一機に相手を殲滅するやり方と同じく、気で詰めていくことで、精神的に圧迫し、相手の技を「さそい」、中途半端な技を相手に出させ、その相手が出てくる瞬間に相手の足を払い、倒して極める技も創りあげました。

私は①相手に技を出させない技、②相手の技を「さそい」、技を出させて、極めるという技を創造したのです。

大切なことは、個性を引き出し、他との違いを独自の表現で創り上げることにあります。空手において、それぞれの特徴を出して得意技を創り上げることが勝利に直結しています。

これは空手の世界だけではなく、小説においても、音楽・絵画・ビジネスにおいても同じです。

コア・コンピタンスという言葉があります。ビジネスにおいて競合他社に圧倒的に上回る核となる得意技術、得意分野を持って経営するということが、会社・組織が生き抜いていくためには必要で重要なことです。

私たちは空手の稽古の中から「創造する力」を学び、「諦」の真理を得なければなりません。「諦」の真理を得るには、空手を途中で止めずに継続し、高い志を持って、そのひとつの事を徹底してやることです。

そうすれば必ず人生を生き抜いて行く方法も身につけることができます。



「社会も人間も時代と共に変化していきます。真に生きていくということは、創造する力を身につけ、変化に対応していくことです」(森)